

受付番号

留学・研究計画書

氏名 守田 まどか	留学機関名 イスタンブル大学
留学先国名 トルコ共和国	留学期間 西暦 2011年9月～2013年8月
研究テーマ 前近代におけるイスラーム的多文化共存都市イスタンブル —街区・住民共同体・都市空間構造—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>グローバル化時代の今日、多様な文化の共存が重要性を増している一方で、現今の世界情勢は、それがいかに困難であるかを示している。しかし、前近代においては、さまざまな文化的背景を有する人々が空間を共にし、共存する社会が存在した。アジアとヨーロッパ、黒海と地中海の結節点に位置するイスタンブルという都市が、その一つである。</p> <p>イスタンブルは、1453年のコンスタンティノポリス陥落後、オスマン朝の首都として新たに建設された都市である。征服後のこの都市は、衰退に向かっていたビザンツ末期の荒廃に加え、オスマン軍による略奪で荒涼とした状況であった。またこの都市は東方正教会の中心地としての千年以上にわたる歴史を有し、このときはじめてイスラームの王朝の手に落ちたため、イスラーム教徒が暮らすための諸施設を欠いていた。そのため、征服後まもなく、征服者スルタン・メフメト2世は、イスラームの礼拝所であるモスクをはじめ、宗教・公共施設や商業施設など都市インフラの整備に精力的に取り組んでいる。このようにイスタンブルは、イスラーム王朝の支配者の主導下で建設されたのであるが、しかし、専らイスラーム教徒が暮らすための空間となったわけではない。それどころか、征服後から19世紀初頭に至るまで、この都市の人口の約4割を占めていたのは、キリスト教徒やユダヤ教徒から成る非イスラーム教徒であった。彼らは大まかな住み分けを行いつつ、完全に分離することはなくしばしば混住も見られたと言われているが、その実態は詳らかではない。</p> <p>それでは実際、このような多様な住民の共存がいかにして可能となったのか。これを明らかにするための重要な手掛かりとなるのが、「街区」（トルコ語で「マハッレ」）である。街区とは、宗教に基づき編成された行政の末端組織であり且つ社会生活を営む上でも重要な役割を果たした居住単位である。イスラーム教徒の街区はモスクを中心に、非イスラーム教徒の街区は教会やシナゴグを中心に形成された。本研究は、この街区という都市の最小単位に着目し、文献史料からその行政機能や街区住民の生活実相に迫るとともに、現地調査とGISの利用により三次元地図を作成し、イスラーム教徒と非イスラーム教徒の居住分布の分析も試みるものである。</p> <p>多文化共存都市イスタンブルの解明を目指す本研究は、数百年にわたり地中海世界に君臨した一大帝国であるオスマン帝国の多元的支配構造の一端を、首都イスタンブルの都市住民の生活というミクロなレベルから分析するものであり、また文献史料の実証的分析に現地調査とGIS利用による空間分析を組み合わせたマルチ・ディシプリナリーな研究である。このような学術的意義に加え、グローバル化時代の今日においてこれまで以上に重要性を帯びている多様な文化の共存する社会の構築にも一石を投げ得る点で、大きな社会的意義をも有すると考える。</p>	

成果報告書

記入日 2014年 4月 15日

氏名 守田 まどか	留学先国名 トルコ共和国	所属機関 イスタンブール大学
研究テーマ： 前近代におけるイスラーム的多文化共存都市イスタンブール—街区・住民共同体・都市空間構造		
留学期間： 2011年 5月～ 2014年 3月		
<p>報告者は、2011年5月から2014年3月にかけて（2013年4月以降は私費延長）、トルコ共和国・イスタンブールに留学し、上記のテーマについて研究を行った。</p> <p>留学開始後の数か月間は、語学学校に通い、現代トルコ語の向上に努めた。2011年10月からは、大学のゼミに参加し、オスマン史料講読の訓練を受けた。当初は、週3コマのゼミの予習と復習に精一杯であったが、徐々に文書館・図書館等での自身の研究・史料収集にも取り組んでいった。以下、その概要を個別に記す。</p> <p><u>首相府オスマン文書館</u></p> <p>文書館・図書館等での史資料の調査・収集のうち、最初に取り組んだのは、イスタンブール所在の首相府オスマン文書館での史料調査である。同文書館には1億5千万点の文書が所蔵されていると言われるが、文書館設立に至った紆余曲折の中で、出所の異なる文書の混入、非近代的分類方法に基づく整理作業などの結果、多くの文書は原秩序が崩壊してしまっているという問題を抱えている。自身の研究テーマに関する史料はあらゆるフォンドに散在していると考えられるため、特定のフォンドに特化するのではなく、さまざまなフォンドのカタログに一つ一つ目を通しながら、本研究に有用な史料の把握に努めた。この作業を通じて、史料が量・質ともに豊富になりはじめる18世紀に焦点を絞ることに決め、都市行政の末端組織である街区を政府がいかに把握（しよう）していたか、政府と街区との間にいかなるやりとりがあったのかという点についての史料を調査・収集した。</p> <p><u>イスラーム研究センター</u></p> <p>文書館での作業後は、研究の拠点をイスラーム研究センターに移し、イスラーム法廷台帳群の調査・収集に従事した。イスラーム法廷台帳は、都市社会史研究にとってきわめて重要な史料である。同センターでは、現在確認されているイスタンブールのイスラーム法廷台帳の大部分をデジタル閲覧することができる。イスタンブールには、主法廷に加え複数の地区法廷があったが、報告者はまず18世紀の主法廷の</p>		

法廷台帳を通時的に調査した。すでに上記文書館で調査・収集した史料が、政府が街区をいかに把握していたかを明らかにするものであった一方、法廷台帳に記された政府への報告書の控えは、政府の命令に対して街区がいかに対応していたかに光を当て、両者間のやりとりを詳らかにするものであった。その他、法廷台帳には、街区住民による動産・不動産の売買や婚姻・遺産相続などの際に作成される証書類の控えも含まれ、これらは各街区の内部構造を知る手がかりとなるものである。18世紀のイスタンブール主法廷の通時的調査により、同世紀の中で、とりわけ、1730年の都市騒乱後（とくにその後約四半世紀帝位にあったマフムート1世の治世、1730-54年）、政府による秩序回復の試みにより、重要な都市行政単位である街区の機能も高められたことが明らかになった。さらに主法廷の台帳に加え、非ムスリムが多く居住した地区に設置されていた地区法廷の台帳について、数点を試験的に取り上げ、特定の街区（ムスリム住民に加え、非ムスリムも多く居住していたと考えられる街区）に関する案件を抽出した。同法廷台帳群は、本研究の主史料を構成するものであり、その調査には一年以上を費やしたが、管見の限り先行研究でこれまで扱われてこなかった興味深い案件を多数収集することができた。

その他の諸図書館

上記史料群の調査がひと段落した後は、その他の諸図書館において、本研究の補足材料となる叙述史料等の調査に従事した。アタテュルク図書館では、オスマン朝末期から共和国初期にかけての知識人で、イスタンブール市に奉職したオスマン・エルギンやムアッリム・ジェヴデトの旧蔵書、およびイスタンブールの古地図を調査・収集した。ミット図書館、スレイマニエ図書館、イスタンブール大学付属稀少書図書館では、18世紀の年代記、文学作品などを調査・収集した。イスタンブールに関する書籍の蒐集と同都市の歴史的建造物の保存にも尽力したチェリク・ギュレルソイのコレクションが閲覧できるイスタンブール図書館では、18世紀イスタンブールを訪れた西欧人の旅行記を調査・収集した。

以上のイスタンブール所在の諸図書館に加え、トルコ共和国首都アンカラに二度赴き（滞在期間は計約一か月）、トルコ歴史学協会図書館、国立図書館において、年代記、文学作品などの調査・収集を行った。同じくアンカラ所在のワクフ総局図書館では、注目しているイスタンブールの特定街区のワクフ文書などを調査した。ただし、同図書館に所蔵される文書の大部分は19世紀以降のものであった。さらに、隣国ブルガリアの首都ソフィア所在のブルガリア国立図書館に赴いた。同図書館には、20世紀初頭、「古紙」としてトルコからブルガリアに流出した文書群が収蔵されるため、豊富なオスマン史料群を有する。既刊カタログの事前調査により、同図書館所蔵のお目当ての史料があったが、閲覧申請した結果、その一部が「行方不明」であることがわかり、現在、同図書館からの連絡を待っている。

以上の諸文書館・図書館における史資料の調査・収集のほか、週末や祝日を利用して、イスタンブールの旧市街地区の実地調査にも積極的に取り組み、とくにモスクを網羅的に巡った。スルタンや政府高官によって設立されたモニュメント的な大規模なモスクよりもむしろ、社会的にも地理的にも街区のムスリム・コミュニティの核を形成していた、小規模でローカルなモスクに注目した。

学会報告

以上の調査の成果の一部は、留学開始から約二年が経過した2013年5月、アメリカ・シカゴ大学で開催された『中東歴史理論学会』に参加し、英語の口頭発表を行った。「都市と街区」というパネルにおいて、18世紀イスタンブルの街区が、当時政府により禁じられていた地方からの移住者の受け入れ基盤となり、地方出身者の都市への定着の道を開いていたことを明らかにした。有益なコメントや助言を得ることができ、研究者や学生と交流することができた。さらに、学会後、一日だけではあるが、同大学附属図書館にて洋書史料の調査・収集も行うことができた。

さらに、留学期間中、以下の活動を行った。

国際研究会への参加

2011年12月9日にアンカラ大学で開催された国際研究会「前近代社会における秩序維持の〈道具〉：紛争処理の文書」に参加した。日本史とオスマン史における文書史料の比較研究をテーマとした同研究会での報告と討論から、新たな知見と視角を得ることができた。また懇親会等ではトルコ語通訳の補助をしつつ、研究者と交流することができた。

「オスマン碑文収集プロジェクト」への参加

日本とトルコの共同研究プロジェクトであり、リサーチ・アシスタントとして携わっている「オスマン碑文収集プロジェクト」に関して、現地トルコでは実地調査に参加した。

2011年8月にはエディルネ（イスタンブル征服前のオスマン朝の首都）、同10月にはネヴシェヒル（18世紀の大宰相の寄進による建築群が存在）、2012年8月にはブルサ（オスマン朝の最初の首都）、2013年6月にはカイセリ（中部アナトリアの都市）へ同行し、碑文調査を行った。具体的には、文献資料での記述と地図をもとに、現地での聞き取りや研究者の協力なども得て、オスマン朝時代に建設されたモスク、マドラサ（イスラーム学院）、公衆浴場、水場、城砦など、諸施設をひとつひとつ巡りながら、建設・修復時に作成された碑文を調査・撮影し、場所と名称を特定・確認していく作業である。近年の都市発展・都市域の拡大によって取り壊されてしまったもの、碑文が剥がされてしまったもの、現存するが荒廃した状態にあるものなど、状況はさまざまであり、また文献資料の記述と一致しないこともしばしばあった。同プロジェクトの目的である、碑文の現状把握と保存という課題は困難であると同時に、急を要することを実感した。

留学中の全体的な感想など

ボスフォラス海峡を挟んでヨーロッパとアジアを跨ぐ、トルコ最大の都市イスタンブルに三年間弱の滞在期間中、最初の二年間は、ヨーロッパ側、新市街の三つの場所で2~4人でルームシェアをした。何度も引っ越すことになった理由は、同居人の都合や、住んでいたアパートの耐震問題による取り壊しなどさまざまであった。同居人は基本的にはトルコ人で（一時期、西欧諸国からの留学生たちが加わったこともあり、その際には、とりわけ台所と冷蔵庫の中が国際色豊かになった）、年齢は20~50代まで幅広く、職業についても、一般企業に勤める会社員から、飲食店経営者、新聞記者、公務員とさまざまであった。平日・週末を問わず、同居人たちの来客が多く、玄関に靴がずらりと並ぶことが日常であった（トルコでも玄関で靴を脱ぐ習慣がある）。同居生活中の自宅は、自身の私的空間というよりもむしろ、年齢・職業ともにバラエティーに富む同居人たちと、さらにその同居人たちを通して、いろいろな人たちと触れ合う場であり、日々の生活の中で常に小さな「発見」があり楽しかった。サロンでの団欒のほか、台所での「井戸端会議」的な立ち話にしばしば花が咲き、ときに夜な夜な話し込んでしまうこともあった。このような同居生活の二年間が経過した頃、日本でも大きく報道されたタクシム広場ゲズィ公園運動が激化する直前、アジア側の郊外にある女子学生寮に移り（それまではその中心現場の徒歩圏内に居住していた）、残りの一年弱を過ごした。この寮には、基本的に報告者のほか外国人はおらず、トルコ国内のさまざまな地方から来た、大学受験生と大学生が寄宿しており、女子校のような雰囲気があった。寮内外で定期的に催される講演会や観劇会などのプログラムにも積極的に参加し、寮の学生たちと交流した。

留学中に親しくなった友人の帰省にしばしば伴って、トルコ国内の諸地方を旅行する機会にも恵まれた。行った先々で、家族・親戚ぐるみで厚くもてなしてもらった。お客をもてなす文化の根付いたトルコならではの、一般の観光旅行とは一味違った旅を満喫することができ、友人との仲も深まった。また、友人の結婚式などにも招待される機会があった。

健康面については、従来通り、規則正しい生活と自炊、節約も兼ねた徒歩を心がけ、心身ともに元気に過ごすことができた。ときどき風邪をひくことがあったが、その度に知人・友人から民間療法を学んだ。

あらゆることが目まぐるしく変化するイスタンブルでの生活は（何度も住まいの場所や同居するメンバーが変わったという事情も相俟って）、「落ち着く」ということがないままに過ぎた。イスタンブルに暮らす人々は概して、臨機応変に対応する柔軟性と即断力を備えているように見えた。知人・友人の中には、反政府デモに参加する人とそれを鎮圧する現政権の政治集会に参加する人、礼拝・断食をせずお酒を飲む人、毎年メッカ巡礼を実践している人などがおり、トルコ国民の間の政治的・宗教的立場の多様性を身近に垣間見た。大学や文書館・図書館などの研究機関での史料調査や研究者たちとの交流に加え、同居生活や寮での生活、通学路、市場での買い物など、日常生活のさまざまな場面で見たこと・聞いたこと・出会った人たちから得られたことは、留學生活中に得たかけがえのない財産であると思う。



↑ 雪が積もると、文書館にも雪だるまが登場する。職員の方々も一緒に記念撮影。



← 寮で知り合った友人の出身地、黒海地方アマスヤにて。友人とその親戚たちと一緒に。

友人のクナ・ゲジェスイ（結婚式の前夜の儀式）。花嫁の掌にヘンナが塗られているところ。↓

↓ 同居人の帰省に伴ってクルシェヒル（中央アナトリア）の村へ。同居人のお母さんと一緒に家の前へ。



↑ 友人のお母さんから、トルコ料理実習。ズッキーニやピーマンなどにお米とひき肉を詰める煮込み料理「ドルマ」。



← 同居人としばしば参加した、イスタンブル郊外をトレッキングするサークル「ベオグラードの森を歩こう会」。



↑ 通学路の風景。家の近所の大通り。



↑ 断食月中のモスク詣で。友人の出身地ウルフア（トルコ南東部）にて。

↓ 通学路の風景。イスタンブルのアジア側とヨーロッパ側を行き来する船の中から。



↑ 通学路の風景。文書館への行き帰りは、新市街と旧市街をつなぐガラタ橋を、魚を釣る人たちを横目に歩いて渡っていた。